

## 東京郷土資料陳列館旧蔵の考古学模型標本 —考古学者・片倉信光による東京市の石器・古墳時代展示について—

平 田 健\*

### 目 次

はじめに

- 1 東京郷土資料陳列館旧蔵の考古学模型標本
- 2 東京郷土資料陳列館について
- 3 東京郷土資料陳列館における考古資料展示
- 4 考古学者・片倉信光と東京郷土資料陳列館
- 5 東京郷土資料陳列館における考古学模型標本の利用

おわりに

キーワード 東京郷土資料陳列館 考古学模型標本 島津製作所標本部 片倉信光

### はじめに

平成27年（2015）、学習院大学史料館所蔵の『古代土器複製標本』<sup>1)</sup>を評価するに当たり、明治末から昭和30年代にかけて製造・販売されていた学校教材用の考古学模型標本を調査していた筆者は、偶然にも江戸東京たてもの園に良好な一括資料が存在することを知った<sup>2)</sup>。この時期、雑誌の広告や販売元の目録からしか考古学模型標本の実態を把握できておらず、1点でも多く実物の模型標本を確認することが研究を進める上で急務となっていた。

『江戸東京たてもの園考古資料一覧—旧武蔵野郷土資料館収蔵資料—』には備考欄に「レプリカ」と注釈のある13点の資料が記載されていた。これら資料群を平成28年（2016）9月に江戸東京たてもの園で調査した結果、島津製作所標本部が戦前期に製作・販売していた模型標本と同定するに至った。この調査では、須恵器及び円筒埴輪模型標本の実測を通じて、模型標本の製作方法の復元に眼目を置いている。『江戸東京たてもの園考古資料一覧—旧武蔵野郷土資料館収蔵資料—』の記載や「有」という注記などから、模型標本が旧有栖川郷土資料館（東京郷土資料陳列館）資料であることは何となく認識していたものの、この段階ではまだ、旧蔵先や用途にまで目を向ける余裕はなかった。

その後、日本各地の学校や研究機関で考古学模型標本の発見に至った筆者は、資料報告をまとめる中で、江戸東京たてもの園所蔵資料に関心が向くようになった。考古学模型標本研究の発端となった旧制

\*東京都教育庁地域教育支援部管理課埋蔵文化財担当学芸員・公益財団法人 古代学協会客員研究員

学習院所蔵資料をはじめ、京都府立鴨沂高等学校所蔵資料<sup>3)</sup>など、模型標本は学校教育の教材として生産・販売されていた。東京郷土資料陳列館旧蔵資料は、教育機関以外で考古学模型標本を購入、利用していた稀有な事例である。と同時に、この事実に対して違和感を覚えたのである。

平成30年(2018)、江戸東京博物館の江里口友子氏を通じて松井かおる氏と知遇を得た筆者は、6月開催の企画展「発掘された日本列島展2018」の地域展として東京郷土資料陳列館に関する展示の協力依頼を受けた。学校の社会科準備室などに所在する考古遺物や民俗資料が散逸や廃棄の危機に瀕しており、それらの調査・活用を実践していた<sup>4)</sup>筆者にとって、廃棄される確率の高い模型標本の歴史と価値を周知する絶好の機会と捉えた。展示制作に関わることで、考古学模型標本を前にして感じた違和感を明確にし、より深化させることができるのではないかという期待もあった。

地域展「東京郷土資料陳列館と考古学」(平成30年6月2日から7月22日まで)では、第2部「考古学模型標本と東京郷土資料陳列館」を担当させて頂き、考古学模型標本の歴史と東京郷土資料陳列館旧蔵資料12点の紹介を行った。

松井かおる氏は、平成27年(2015)3月に江戸東京たてもの園で開催された特別展「下布田遺跡－武蔵野の歴史と考古学－」において、考古遺物や写真資料から東京郷土資料陳列館を復元され<sup>5)</sup>、以後も継続的に調査を進められていた。地域展のための打ち合わせでは、様々な調査成果を御披瀝頂いたが、東京郷土資料陳列館に勤務していた専門職員が片倉信光という若き考古学者であることは、考古学模型標本を評価する中で極めて重要な発見であった。

本稿では、地域展「東京郷土資料陳列館と考古学」で触れることができなかった個々の考古学模型標本<sup>6)</sup>について、原品の同定と研究史的な価値付けを行い、観察結果から得られた模型標本の製作方法などを整理する。その上で、これら模型標本を所蔵していた東京郷土資料陳列館の概要や展示室内の様子を文献資料や写真類から明らかにする。また、展示設計段階から東京郷土資料陳列館嘱託として関わっていた考古学者・片倉信光の経歴や考古学研究を踏まえた上で、模型標本の展示等の利用を復元していきたい。模型標本の評価に際してはやや遠回りをしている印象は否めないが、筆者が感じた違和感の琴線に触れるには、この方法が最短経路であると信じる。

なお、以降本文中では敬称を略したことをご承知置き頂きたい。

## 1 東京郷土資料陳列館旧蔵の考古学模型標本

旧有栖川宮郷土資料館資料として江戸東京たてもの園に引き継がれた資料群のうち、考古学模型標本は14点ある。このうち、手捻りで作られた人物埴輪(資料番号99345497)を除く13点について実査した結果、株式会社島津製作所標本部が製作・販売した考古学模型標本と同定した。

模型標本には朱書き、紫インクのスタンプ、ラベル及び墨書により複数の個体番号が付されている【表】。朱書きは「H」に2桁の算用数字が続くものと、「H」の前に「TKSC」が付されるものがある。「TKSC」は「Tokyo Kyodo Shiryo Chinretsukan」の頭文字をとったものであろう。紫インクのスタンプは2桁の算用数字、ラベルは「IV」または「V」のローマ数字と2桁の算用数字の組み合わせである。そして

【表】東京郷土資料陳列館旧蔵考古学模型標本

図版番号	注 記				標本名 (目録掲載)	原品出土地 (目録掲載)	縮尺	価格 (円)
	朱書き	スタンプ	ラベル	墨書				
図1-1	—	—	—	IV179/ 有180	土偶 男	羽後国北秋田郡七座村大字麻生字 上ノ山	実大	1.4
図1-2	—	—	—	—	貝輪	常陸国(ママ)海上郡海上村大字 金山(ママ)	実大	0.7
図1-3	TKSC.H.27.	27	V-27	有177	埴輪土偶	相模国鎌倉郡鎌倉村采女塚	実大	5.0
図2-4	T.K.S.C H26	—	—	有178	埴輪土偶 女子	下野国河内郡雀宮村菖蒲塚	1/2	2.0
図2-5	T.K.S.C.H.28./ H:28	—	—	有179	埴輪土偶 男子(武装)	上野国新田郡世良田村大字世良田	1/3	4.0
図3-6	H.18.	18	—	有171	蓋坏	丹波国船井郡新庄村池上	実大	1.2
図3-7	—	18	—	有175	坏	丹波国船井郡新庄村字池上	実大	1.0
図3-8	H.24	—	IV24	有175	罎(臺ナキモノ)	美濃国稲葉郡鶴飼村	実大	1.0
図3-9	H.21	—	IV-21	有173	甗	丹波国船井郡新庄村大字池上	実大	1.5
図3-10	H.20.	20	—	—	提瓶	備前国赤磐郡	実大	2.0
図3-11	H.23.	—	IV-23	14/ 有174	瓶	三河国額田郡	実大	2.0
図3-12	H.25.	—	IV-21	有176	横瓶	丹波国船井郡新庄村大字池上	実大	3.0
図4-13	T.K.S.C.H.29.	29	29	有181	埴輪円筒 上下同周ナラザルモノ	武蔵国比企郡大岡村大字大谷	1/2	1.2

墨書は、「有」と3桁の算用数字を組み合わせたものである。「有」は有栖川宮郷土資料館資料の略称である。朱書き、紫インクのスタンプ及びラベルの2桁の算用数字は概ね一致していることから、3者に連関性が伺える。一方で墨書は算用数字の桁が異なっていること、有栖川宮郷土資料館という呼称は東京郷土資料陳列館時代には用いられていないこと、「埴輪土偶」模型標本【図1-3】でラベルの上に墨書きされた前後関係から、より新しく付された番号である。

以上のように、13点の考古学模型標本には少なくとも2系統の個体番号が記されていることが指摘できる。ところで、博物館資料に番号を付すのは財産登録や資料管理が目的であり、資料の受贈あるいは購入時、そして所管替えなどでの記載が想定される。本模型標本は、①東京郷土資料陳列館受入(昭和9年頃以降)、②武蔵野博物館移設(昭和23年以降)、③武蔵野郷土館移管(昭和28年頃以降)、④江戸東京たてもの園移管(平成6年以降)という変遷を経て今日に継承されている。このうち、④において東京都建設局から委託を受けた財団法人東京都公園協会が、武蔵野郷土館閉館に伴う資料整理を実施して『武蔵野郷土館所蔵資料目録』<sup>7)</sup>を編集した。模型標本には、「19」に続く196から207、240までの3桁の数字が割り振られている。この3桁の数字は模型標本に墨書された3桁の数字と一致しない。

このため、考古学模型標本に記された2系統の個体番号は、東京郷土資料陳列館受入時(昭和9年以

降)か、武蔵野博物館移設時(昭和23年以降)に該当する可能性が高い。特に、『武蔵野郷土館所蔵資料目録』で東京郷土資料陳列館旧蔵資料は「旧有栖川宮郷土資料館資料」と表記されており、「有」と3桁の数字による墨書は武蔵野博物館移設時(昭和23年以降)に付されたと思われる。朱書き、紫インクのスタンプ及びラベルは東京郷土資料陳列館受入時(昭和9年以降)の登録番号と考えられるが、3種類の記載方法の違いなど不明な点も多い。現時点で2系統の個体番号は、武蔵野博物館移設時以前に付された蓋然性が高いことを指摘するに留めたい。

次に、各種模型標本の所見及び原型となった考古遺物について詳述する。なお、標本名は島津製作所標本部が昭和5年(1930)に発行した『歴史地理学用標本目録』<sup>8)</sup>に準拠した。

### (1) 「土偶 男」模型標本【図1-1】

秋田県能代市二ツ井麻生字上ノ山出土土偶の模型標本である。原寸大で全長14.0cm、最大幅9.2cm、最大厚4.2cmを測る。石膏彩色で頭部背面に「IV179」及び「有180」の墨書がある。頭頂部2個の突起と左足正面に製作時に付着した指紋が認められる。頭部左側面、左手正面、背面に摩滅があり、石膏が剥き出しになっている。

本模型標本は、大野延太郎(雲外)が明治30年(1897)12月、人類学調査で栃木県他2県に出張した際スケッチした図を基に原型が製作されたもので、背面の沈線文様が推測であることは先行研究で指摘している<sup>9)</sup>。原型製作者が実物資料を確認していないことは、本来隆起するはずの乳房が、大野延太郎筆の木版刷り及び石版刷りスケッチ図の陰影表現を見誤り窪ませていることから明白である。原品は、明治40年(1907)前後に東京帝国大学人類学教室の所蔵となった。

### (2) 「貝輪」模型標本【図1-2】

千葉県銚子市余山貝塚出土貝輪の模型標本である。石膏着色で、5片に割れたものを接合している。原寸大で殻長10.7cm、殻高8.0cmを測る。注記はないが、台帳上は「IV74」として登録されている。

フネガイ目に属する二枚貝の中でも、放射肋が約46本あることからアカガイに同定される。放射肋や内面側歯には細かい刻み目によって輪肋が表現されているほか、腹縁も放射肋に対応して凹凸を形成する。

明治30年代に発見された余山貝塚は東京近郊の大貝塚で、発見直後から多くの研究者や考古家が遺物採集のため現地を訪れている<sup>10)</sup>。貝輪の発見は成田市在住の考古家・大野市平が最初である。大野延太郎(雲外)は、大野市平が採集した未製品を含む資料から貝輪製作方法の復元を試みている<sup>11)</sup>。5度の遺物採集を敢行した江見忠功(水蔭)もまた、同行者が一度に約240個の貝輪を採集するなど<sup>12)</sup>、余山貝塚は、貝輪製作址として逸早く認識されていた。

貝輪の用途について大野延太郎(雲外)が台湾原住民の使用例などから腕輪乃至垂飾品としたのに対し、江見忠功(水蔭)は実際に腕に嵌めるのは不可能で、秋田県牡鹿半島の事例から漁網の裾に錘として括り付ける漁撈具であると反駁した。



【図1】東京郷土資料陳列館旧蔵縄文時代遺物及び人物埴輪模型標本写真（縮尺任意）

### (3) 「埴輪土偶」 模型標本【図1-3】

神奈川県鎌倉市采女塚古墳出土埴輪女子の模型標本である。原寸大で最大高27.6cm、腕部最大幅17.7cmを測る。石膏着色。内面に朱書きで「TKSC.H.27.」、背面下端にラベル「V-27」、紫スタンプ「27」及び墨書「有177」の注記がある。ラベルの上に墨書されていることから、各種に共通する「27」という番号が最初の登録で、「有177」は再登録された番号である。

本埴輪は、明治20年(1887)新道開削の際に人物埴輪、馬形埴輪及び円筒埴輪とともに出土した。神奈川県尋常師範学校で一括保管されていたが、明治29年(1896)頃に一部が須藤求馬の手に渡った<sup>13)</sup>。その後、大正7年(1918)には本埴輪を含む人物埴輪4点及び馬形埴輪1体が京都帝国大学に購入され<sup>14)</sup>、現在に至る。大野延太郎(雲外)が『日本考古圖譜』<sup>15)</sup>で石版刷りを掲載したり、坪井正五郎が論考で取り上げたりする<sup>16)</sup>など、明治期から比較的良好に知られた人物埴輪であった。

原品は、大野延太郎(雲外)のスケッチ図<sup>17)</sup>や『日本考古圖譜』<sup>18)</sup>によると、頭髪を島田髷に結び、両耳に耳環、頸部に欠損を含め15個の勾玉を付している。右肩から左腰にかけて領巾を纏う。顔面はナデ調整により器面を平滑にし、額と頬骨に赤彩を施している。胴部全面に縦位ハケメ調整を施し、両袖にも赤彩が認められた。

模型標本は原寸大で製作されており、フォルムは実物に近い。ハケメ調整の凹凸が浅いことや、杏仁形の目は成型後に削り抜いているため、右目がややつりあがったように見えるなどの違いはあるが、領巾の剥離面下に残る縦位ハケメや左脇下の強いユビナデなど調整は丁寧に再現されている。彩色は薄橙、焦茶など複数色を重ね塗りする。剥離面には灰色や暗い色を落としているが、赤彩表現は確認できなかった。左耳下及び左脇に段を有するパーティングラインが確認され、右脇下には縦位方向に器面を削った痕跡があることから、型を用いた成形であることがわかる。内面は石膏を打ち付けたまま着色している。

### (4) 「埴輪土偶 女子」 模型標本【図2-4】

栃木県宇都宮市綾女塚古墳出土埴輪女子の模型標本である。原品を二分の一に縮小したもので、最大高28.6cm、裾部最大幅13.4cmを測る。石膏着色で、頭部内面を観察すると前面と背面で接合した痕跡が確認できる。背面裾部に朱書きで「T.K.S.C H26」、ラベルを剥がした後、同箇所にも墨書で「有178」と注記する。内面にもラベルを剥がした痕跡がある。前身頃に縦2.5cm、横4.0cmの長方形ラベルが剥がれた跡が認められた。【図2-5】円筒部前面に貼付される島津製作所標本部のラベルの跡であろう。

綾女塚古墳は明治17年(1884)、東北本線線路敷設で墳丘が開削され、この時には靱形埴輪が出土した<sup>19)</sup>。墳丘は昭和37年(1962)頃には完全に削平されたと考えられるが、全長40mで南北に主軸を持つ前方後円墳で、主体部は横穴式石室であった可能性が指摘されている<sup>20)</sup>。

本埴輪は明治28年(1895)3月頃、河内郡雀宮駅(現、東日本旅客鉄道株式会社東北本線雀宮駅)停車場建設に伴い円筒埴輪とともに出土したもので、八木柴三郎が詳細な報告を行っている<sup>21)</sup>。当初は工事主体者である日本鉄道株式会社保線課の所蔵で、明治31年(1898)刊行の『日本考古圖譜 古墳物及青銅器之部』では「理科大學人類學教室の陳列」<sup>22)</sup>となっているが、明治39年(1906)7月発行の東京人類学会撰『人類學繪はかき』第一回(6葉一組、志村寫真版印刷所)で「東京帝國大學理科大學人類

學教室所蔵」とあることから、明治31年(1898)から明治39年(1906)の間に東京帝国大学に寄贈されたと考えられる。大正8年(1919)発行『下野考古資料』絵葉書集(50葉一組、下野史談会)や『歴世服飾圖説』上<sup>23)</sup>など、古墳時代の服飾の代表例として高橋健自らにより取り上げられた著名な埴輪である。

出土当初から半身像下の円筒部は失われており、左裾端部も大きく破損。頭部は分銅形の島田髷が三分の二欠損し、左前頭部にかけて剥落が認められる。勾玉や丸玉を表現した頸部の粘土粒も全て欠落し、押圧した痕跡だけが残る。頸部及び両腕は接合している。6世紀の所産と考えられる。

頭髮は島田髷に結び、頭頂部には粘土板で豎形櫛を表現する。分銅形の島田髷背面中央に円孔を穿つ。額の突帯と朱線の鉢巻は鬘を表したものであろうか。眉はあまり隆起させず、目は杏仁形である。両耳は耳孔部分に穿孔、耳環を付ける。脛から頬にかけて楕円形の赤彩を八の字に施していたようである<sup>24)</sup>が、平成9年(1997)時点では痕跡すら確認できていない<sup>25)</sup>。

最も特徴的な装束は盤領で左衽、2箇所を赤紐で留めている。段と沈線で衿を表現し、帯に鋸歯状文を施した後に赤彩する。胴部全面は比較的細かい縦位ハケメ調整である。

原品と模型標本を比較すると、島田髷や左裾端部の欠損は復元されており、頸部には粘土粒による丸玉が再現されている。模型標本は五指が開いた状態であるのに対し、原品では親指以外を一体で作出し、沈線で各指を表現する点や、耳孔の有無などの違いを指摘できる。目の削り抜き幅が狭いことや全体の彩色において橙色が強い点も、第一印象が良くない一因であろう。一方、原品に比べると荒いが胴部全体に縦位ハケメを施していることや赤彩箇所は忠実に再現されている。特に島田髷背面に穿孔している点は、模型標本の原型製作者が事前に原品を確認している可能性を示唆している。

#### (5)「埴輪土偶 男子(武装)」模型標本【図2-5】

群馬県新田郡世良田出土の挂甲武人埴輪の模型標本である。原品を三分の一に縮小したもので、高さ45.6cm、草摺の最大幅16.1cmを測る。粘土成型後に赤色着色及び焼成後、黄土色で粘性の低い染料を塗布している。草摺と脚部で分離することができ、両面2カ所の柄穴を木芯で結合する。弓先端部は欠損、胴部と円筒部下端に針金が巻かれている。

円筒部前面に「土偶(男子, 武装)」「上野國新田郡世良田村大字世良田」「(三分ノ一)」及び「株式会社島津製作所標本部」と記されたラベルが残っている。円筒部の株式会社島津製作所標本部ラベル上部に「T.K.S.C.H.28.」の朱書き、草摺底面(脚部との接合面)に朱書きで「H:28」及び墨書「有179」の注記がある。

明治年間、土地所有者の高柳倉吉が自宅前にあった円墳を開墾した際に出土した本埴輪は、境郵便局長であった中澤廣勝の仲介で、東京帝室博物館歴史部列品鑑査掛技手の和田千吉が引き取るようになった<sup>26)</sup>。和田千吉は姫路郵便電信局を経て東京電話交換局に勤務しており<sup>27)</sup>、中澤廣勝とは通信省を通じて面識があった可能性もある。彫刻家・吉田白嶺による修理を経て東京帝室博物館に出品されていたが、昭和20年(1945)5月に和田千吉が逝去すると、昭和33年(1958)頃に天理参考館の所蔵となり、昭和34年(1959)12月18日付けで重要文化財に指定された。6世紀の所産である。



【図2】 東京郷土資料陳列館旧蔵人物埴輪模型標本写真（縮尺任意）



天理大学附属天理参考館の常設展で展示されている原品を見ると、鉾留衝角付冑の衝角部及び左頬当て、肩鎧、草摺、右脚衣袴の大半は石膏で復元されている。

鉾留衝角付冑を被り、右衽の胴丸式挂甲は前面2カ所を引合緒で留める。手には諸籠手を嵌め、左手首には鞆を装着する。衣袴には脚結が施されている。頭椎大刀を佩き、左手に大弓、4本の矢を盛った鞆に右手を掛ける。円筒部は楕円形で側面に二孔一対の透かし孔を施し、脚部に近い箇所と下端部に突帯を巡らす。

顔面など一部を除き、頭頂部から台部にかけて縦位ハケメ調整を全面に施す。挂甲は幅広と幅狭の縦位沈線を一気に引き、幅広の区画には適宜横線を引くことで小札を表現する。幅狭の区画は幅広の横線と同じ位置に二本線を引いており、これは革などの威料を小札の威孔に通したものを表していると思われる。同様の表現は草摺端部にも認められる。胸部2カ所の引合緒には赤彩を施している。

原品と模型標本を比較すると、鉾留衝角付冑の鉾の有無や鍔の表現、頬当ての大きさ及び簡略化、左手の位置及び鞆の有無、円筒部透かし孔の有無など相違があるものの、全体的なプロポーションや彩色は比較的原品に近い。挂甲の小札は寸法こそ異なるものの、原品を正確に再現している。また、右衽引合において、豎上から長側までが横位刻みで、草摺部分を矢羽状にすることや、腰札と草摺最下段の小札を湾曲させるなど、細かい点も丁寧に作り込まれている。

ハケメ調整は衣袴と円筒部のみ認められる。石膏型などを用いた成型のため、ハケメ凹部は浅く、沈線部の角は丸みを帯びている。衣袴正面のハケメ調整は凹線がシャープであるが、これは成形時に板状工具で別途ハケメ調整を施したためと考えられる。

ところで、筆者は同種模型標本を東京女子高等師範学校(現、国立大学法人お茶の水女子大学)旧蔵の考古学模型標本の中から発見し、報告している<sup>28)</sup>。東京女子高等師範学校旧蔵資料【図5】と本模型標本を比較すると、後者の模造精度が各段に高くなっている。例えば前者は堅矧細板鉄板鉾留衝角付冑として復元されていること、挂甲は同じ幅の縦位隆帯で表され右衽がないこと、草摺下端部は2列の草組覆輪で表現されていることなど、印象が大きく異なる。東京女子高等師範学校旧蔵資料は、島津製作所標本部が株式会社に改組する以前、即ち大正3年(1914)から大正6年(1917)に製作・販売されたことが判明している。一方で本模型標本のラベルには「株式會社 島津製作所標本部」と明記されており、株式会社改組後の大正6年(1917)以降に製作・販売されたものである。2つの模型標本の相違から、島津製作所標本部においては継続的に模型標本の改良や修正が行われていたことがわかる。

#### (6) 「埴輪円筒」模型標本【図4-13】

埼玉県東松山市大谷出土の円筒埴輪の模型標本である。二条突帯三段構成で原品を二分の一に縮小、高さ18.6cm、口径10.2cm、底径4.0cmを測る。粘土成型後に象牙色着色及び焼成。内面にはラベル及び直接紫インクのスタンプで「29」を押印し、「T.K.S.C.H.29」の朱書きがある。また、底面に「有181」と墨書する。

原品は東京国立博物館所蔵。『東京帝室博物館歴史部第二區列品埴輪目録』<sup>29)</sup>によると、列品番号は840で「武藏國比企郡大岡村大字大谷發掘」とある。3桁の列品番号から、帝室博物館初期段階で登録

されたものである。『明治十一・十二年埋蔵物録』において、明治12年(1879)に買い上げられた島根県簸川郡塩谷村字上塩谷出土金銅製轡鏡板の列品番号が783であることから<sup>30)</sup>、本埴輪もこの前後に登録されたと考えられる。出土地や遺物自体に特筆すべき点はないが、本円筒埴輪は古くから模型標本の原型となり、今日に至っている。これは、明治末から大正期にかけて名古屋市中区南武平町の清水五六が販売した『埴輪標本』<sup>31)</sup>の中に、本埴輪円筒の模型標本が含まれたことが一因のようで、その監修は東京帝室博物館学芸委員の高橋健自であった。完形品の円筒埴輪の稀少性から、本埴輪が模型標本の原型として採用されたものと思われる。

原品は高さ40.9cm、口径22.0cm、底径9.6cmで口縁部に若干の欠損があるものの、ほぼ完形。口唇部は横位ナデ、胴部は8条単位の縦位ハケメ調整を施す。底部付近をヘラ削りしており、先細の不安定な印象を与える。内面は口縁部から第二突帯付近まで横位ハケメ調整。突帯は粘土紐を貼付した後に強いユビナデを施すもので、断面は低いM字状を呈する。第一突帯は器高のほぼ中央部に位置し、第二突帯は口縁部に近い。第二段の透孔は円形で二孔一対、上部から反時計回りに削り抜いており、上部にズレが生じている。【図4写真】<sup>32)</sup>。色調は濃赤褐色。以上の観察結果から、本埴輪は6世紀後葉に比定される。

模型標本と原品を比較すると、縮尺は二分の一より一回り小さいが、低いM字状の突帯やその位置、不安定な底部など全体的なフォルムは近似する。外面の縦位ハケメは型取りによるため沈線の凹凸は明瞭でないが、成形後に板状工具でハケメ調整を行った部分が2カ所確認される。このハケメ調整は、透孔の90度の位置で対をなしていることから、型の合わせ目部分に該当すると思われる。ハケメ調整は底部にまで及び、原品のヘラ削りは再現されていない。内面も縦位ナデ調整のみで、上半部の横位ハケメ調整は再現されていなかった。透孔上部に薄い半円状の沈線が認められるが、これは成形時に円孔を削り抜く際の目印で、型に陽刻されていたものであろう。

#### (7) 「蓋坏」模型標本【図3-6】

京都府南丹市八木町池上出土の須恵器坏蓋の模型標本である。原寸大で口径11.6cm、器高3.5cmを測る。口縁部に数カ所の欠損が認められるがほぼ完形。粘土成形後に青灰色着色及び焼成。内面に紫インクのスタンプ「18」を押印、朱書きで「H.18.」及び「有171」を墨書する。

原品不明のため比較はできないが、頂部外面及び内面のロクロ目は凸部が明瞭である。また、稜は3mm程の沈線で表現される。口縁部内面に青灰色の流れた筋が確認できることから、釉薬の漬け掛けのような方法で着色したと思われる。稜線の簡略化、口縁部が外側に開くことなどから、TK10型式段階(6世紀中頃)に比定される。

#### (8) 「坏」模型標本【図3-7】

京都府南丹市八木町池上出土の須恵器坏の模型標本で、「蓋坏」模型標本【図3-6】とセット関係にある。原寸大で口径9.3cm、受部径11.9cm、器高3.8cmを測る。口縁部に欠損が認められるがほぼ完形。粘土成形後に青灰色着色及び焼成。体部外面に紫インクのスタンプ「18」を押印、底面に「有175」と墨書する。

原品不明のため比較はできないが、口唇部や受部の蓋坏との接地面は一般的な須恵器のように窪みがなく直線的である。特に口唇部は厚ぼったい印象を受ける。底面のロクロ目は明瞭だが、内面は不定方向のユビナデ調整を施しており、ロクロ目は確認できない。また、立ちあがり内面の下端に沈線が認められるが、これは立ちあがりを内側に折り込みながら受部を作り出した際の痕跡を模したものであろう。受部から体部外面にかけて青灰色の流れた筋が見られることから、「蓋坏」模型標本【図3-6】同様の着色方法と考えられる。

器高が低く全体的に扁平であることや、立ち上がり内傾の角度などから、TK10型式段階（6世紀中頃）に比定される。

#### (9) 「盃」模型標本【図3-8】

岐阜県岐阜市黒野出土の須恵器盃の模型標本である。原寸大で口径9.4cm、器高7.0cm、底径5.0cmを測る。口縁部から胴部にかけて亀裂が入るが完形である。粘土成形後に白灰色着色及び焼成。底部内面に「H.24」の朱書き、底面にラベルを貼付し「IV24」の注記及び「有175」の墨書がある。

原品不明のため比較はできないが、口縁部が若干肥厚する盃で、胴部中央に3条の凹帯を巡らす。表面や彩色が剥離した部分を観察すると、最初に白色の割合が多い白灰色の染料を漬け掛け及び塗布し、乾燥後に灰色の割合が多い白灰色の染料を塗布していることが判明した。

#### (10) 「甗」模型標本【図3-9】

京都府南丹市八木町池上出土の須恵器甗の模型標本である。原寸大で口径9.3cm、胴部最大径9.9cm、器高12.5cmを測る。粘土成形後に青灰色着色及び焼成。口唇部に若干欠損があるほかはほぼ完形。胴部外面に朱書きで「H.21」及び墨書「有173」と注記、「IV-21」と記載したラベルを貼付する。

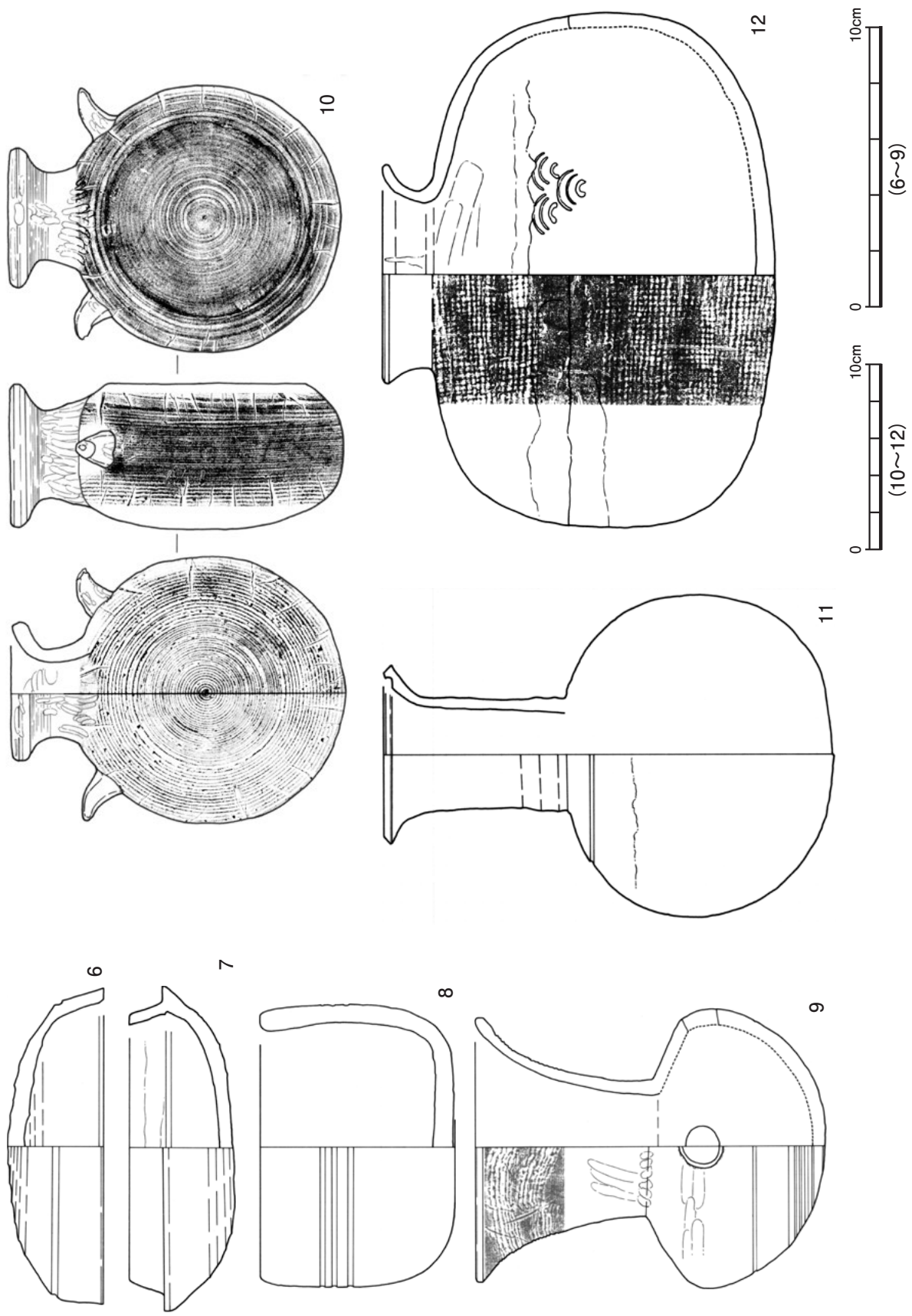
原品不明のため比較できないが、口径より胴部最大径が若干大きく、頸部上位に6条及び8条の櫛歯状工具による波状文を施す。切り合いから時計回りに施文したことがわかる。頸部下位は一部に縦位ミガキ、頸部と胴部の接合部には棒状工具を連続して押圧した跡が残る。底面はヘラ削りに近いカキメが施される。胴部最大径の位置に開けられた注口は、成形後に外部から穿孔されたもので、同位置には帯状に太いミガキ調整が行われている。頸部内面には横位ナデ調整が施される。

注口部から胴部内面を観察すると、彩色は最初に黄土色の染料を漬け掛けし、乾燥後に灰色の染料を同様に漬け掛けしていることがわかった。以後、染料の漬け掛けを複数回行い、青灰色に調整したと考えられる。

胴部最大径が口縁部より大きいことや、頸部があまり窄まない点などから、TK10型式段階（6世紀中頃）に比定される。

#### (11) 「提瓶」模型標本【図3-10】

岡山県赤磐郡出土の須恵器提瓶の模型標本である。原寸大で口径7.0cm、胴部最大径14.3cm、器高17.7cmを測る。粘土成形後に青灰色着色及び焼成。角状把手右側端部が剥離しているが、ほぼ完形。胴部背



【図3】 東京郷土資料陳列館旧蔵須恵器模型標本実測図

面に朱書きで「H.20.」及び紫インクのスタンプ「20」を押印する。

原品不明だが、胴部背面が若干凹む円形の胴部に角状把手が付くもので、頸部は内傾した後に外側に開き口縁部に至る。胴部表面及び裏面に同心円状のカキメを施す。胴部側面には7本単位の縦位カキメが認められるが、これは表面と裏面を別々に成形した後に接合したもので、合わせ目を消す意図があったと思われる。口唇部から頸部にかけても正面及び裏面に縦方向の接合痕が認められ、幅3mm程度の縦位ミガキを細かく施している。胴部と頸部の接合部分にも同様の縦位ミガキが認められる。頸部上位のカキメは胴部と異なり浅い。

胴部内面を覗くと、彩色は灰色の染料を漬け掛けした後、黄土色で粘性の低い染料を漬け掛けすることで土の付着を表現している。

口縁部や把手の形状などから、TK10型式段階（6世紀中葉）に比定される。

### (12) 「瓶」模型標本【図3-11】

愛知県額田郡出土の須恵器フラスコ形瓶模型標本である。原寸大で口径8.8cm、胴部最大径17.3cm、器高24.2cmを測る。粘土成形後に白灰色着色及び焼成。口縁部下端が一部剥離するが、ほぼ完形。頸部と胴部は接着剤で再接合されている。胴部外面に朱書きで「H.23.」及び墨書「有174」と注記、底面に墨書「14」の注記及び「IV-23」と記載したラベルを貼付する。

原品は不明だが、球形の胴部に筒状の頸部、口縁部は若干外に広がる。口唇部内面には粘土帯を貼付し、内面を削り出すことでつまみ上げ口縁を作出する。頸部下位にはロクロ目が表現される。胴部上半には液体状の粘土か粘性の強い釉薬を掛けており、1条の沈線を施す。

器面は全体的に痘痕状を呈する。口縁部から頸部にかけて幅3mm程度の縦位ミガキを施した後、棒状工具による刺突で痘痕状を再現しているが、これは合わせ目を消す目的であったと考えられる。

胴部内面に染料が掛けられていない部分があることから、白灰色の染料を漬け掛けした後、黄土色で粘性の低い染料を漬け掛けしていたことがわかる。

口唇部形態、頸部と胴部の高さ比などから、7世紀中葉に比定される。

### (13) 「横瓶」模型標本【図3-12】

京都府南丹市八木町池上出土の須恵器横瓶模型標本である。原寸大で口径11.9cm、胴部最大幅27.7cm、器高21.0cmを測る。粘土成形後に青灰色着色及び焼成。完形ではあるが、胴部中央で横方向一直線と、その反対面で斜め方向一直線の割れがあり、接着剤で再接合している。胴部外面中央に朱書きで「H.25.」、墨書「有176」及び「IV-21」と記載したラベルを貼付する。

原品は不明だが、俵形の胴部に短い頸部と口縁部を付す。胴部外面は全面に格子叩きを表現している。胴部は上下で分割成形後に接合したもので、ほぼ中央に接合痕が確認される。接着剤で再接合した横方向一直線の割れは、この接合部に該当する。接合痕の上下約2cmの幅で格子叩きが認められないが、これは胴部の上下を併せた後、粘性の低い粘土を塗布したためである。内面は胴部中央から底部にかけて3本単位の青海波叩きを表現する。胴部上位にかけては青海波叩きの上から粘土を被せており、接合部

の補強を行っている。胴部上位には横位ナデが認められる。彩色は青灰色の染料を漬け掛けした後、黄土色で粘性の低い染料を漬け掛けしている。

概ねTK209型式～217型式（6世紀後半～7世紀）に比定される。



【図4】東京郷土資料陳列館旧蔵円筒埴輪模型標本実測図及び実物写真



【図5】東京女子高等師範学校旧蔵人物埴輪模型標本写真（縮尺任意） お茶の水女子大学所蔵

東京郷土資料陳列館旧蔵の考古学模型標本で島津製作所標本部の製品は、縄文時代の土偶【図1-1】と貝輪【図1-2】、古墳時代の人物埴輪【図1-3、図2-4・5】、円筒埴輪【図4-13】及び須恵器【図3-6~12】の以上13点である。このうち、須恵器模型標本は坏及び坏蓋、盥、甗、提瓶、フラスコ形瓶及び横瓶と器種に富んでいることが特徴である。

須恵器模型標本のうち、坏蓋【図3-6】、坏【図3-7】、甗【図3-9】及び横瓶【図3-12】の原型は京都府南丹市八木町池上出土と共通している。島津製作所標本部の目録によると、「高坏（透シノナキモノ）」模型標本、「赤焼埴」模型標本<sup>33)</sup>が同地出土品を模している。横瓶【図3-12】の原品は島津製作所標本部所蔵となっており<sup>34)</sup>、模型標本製作のため島津製作所標本部は積極的に考古遺物を収集していた。これは、京都府内の遺跡や遺物に精通していた岩井武俊が島津製作所標本部の模型標本監修に当たっていたことと関係があるように思われる<sup>35)</sup>。

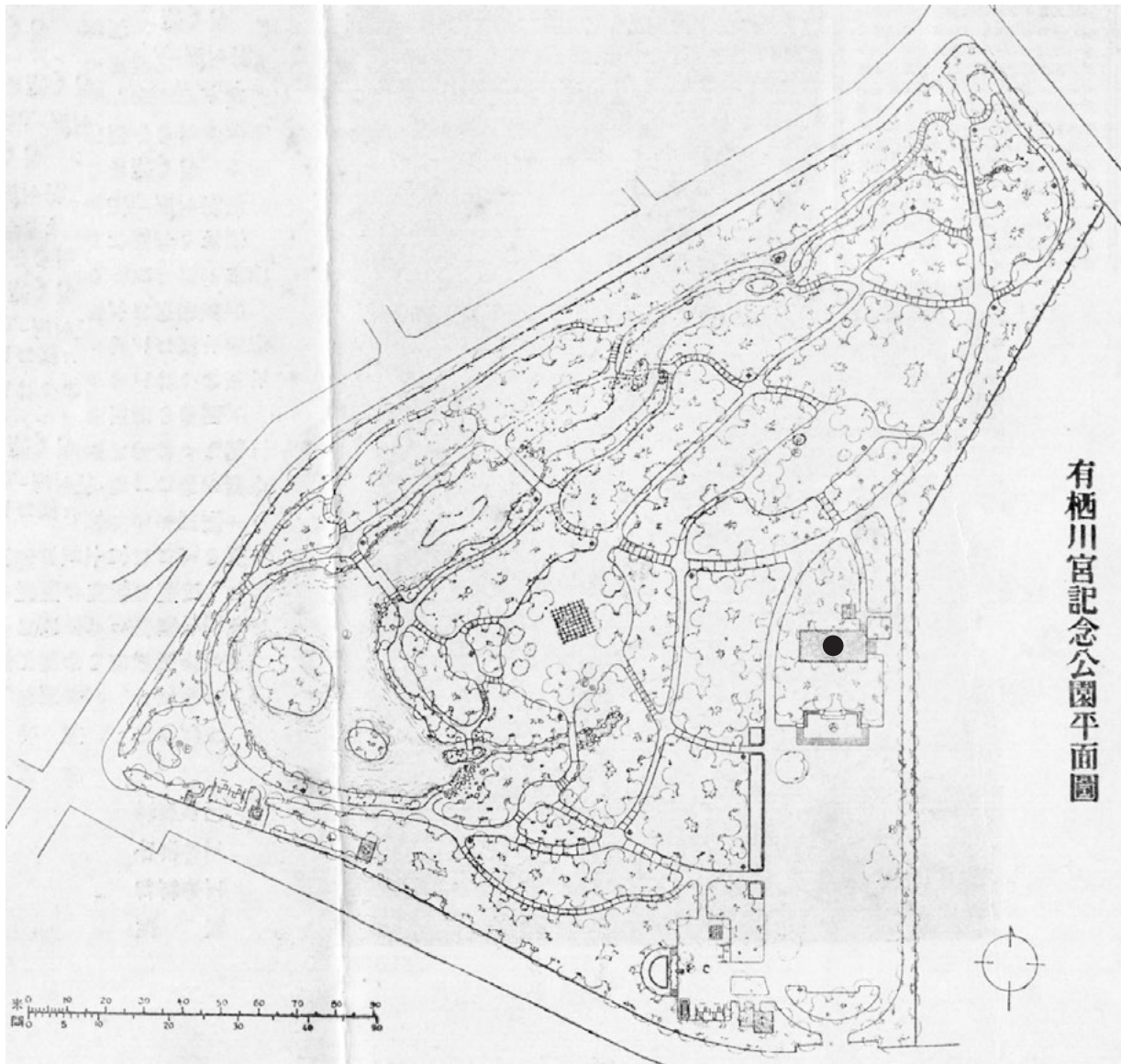
## 2 東京郷土資料陳列館について

13点の考古学模型標本を所蔵していた東京郷土資料陳列館は、昭和9年（1934）1月5日に高松宮宣仁親王より東京市に賜与された御用地約1988坪内に建設された郷土博物館である。敷地は旧盛岡藩主南部美濃守の下屋敷に当たる。東部丘陵地から急峻な崖線を隔てて西北部低地に至る地形を巧みに利用し、公園を設計したのは東京市市民局公園課長の井下清である。高松宮宣仁親王は、男系後継者がおらず断絶した旧有栖川宮の祭祀を継承していた。御用地賜与が旧有栖川宮第10代当主威仁親王命日を記念して行われたことから、「有栖川宮記念公園」と命名された<sup>36)</sup>。東京郷土資料陳列館は東部丘陵地に建設され【図6】、公園同様、昭和9年（1934）9月17日に開館した。

東京郷土資料陳列館は、敷地約700坪の2階建てで計画された<sup>37)</sup>ものの、予算等の都合で建設費4700円<sup>38)</sup>、約40坪の木造平屋建てで開館した。このため、パンフレット等では「東京郷土資料假陳列館」と明記されることもある。昭和15年（1940）の記録では躯体は木造コンクリート外壁、建坪42坪、陳列室のほか、事務室、休憩室、倉庫を付属していた<sup>39)</sup>。

井下清は「市民に市政の現況のみならず其の都市の自然の人文の發達の歴史に對し正しき認識を與へ、自ら都市の動向を判じ得べき英智を涵養すべき適切なる種々の機關」<sup>40)</sup>と東京郷土資料陳列館を位置付けている。対象は主に小学児童で、各項目の説明を図解的に編集し、引率教師の講話の補助に資するよう絵画・写真を多用した。専門的な文献や標本は極力省略し、図表の補助として若干の標本を展示した。図表は東京市市民局公園課職員が作成、専門職員2名が常駐しており、そのうち1名は後述する片倉信光であった。資料収集に当たっては、藤澤衛彦（江戸趣味方面）、渥美清太郎（演芸方面）、町田嘉章（音響方面）ら後に各方面で専門家として活躍する人々も参画している<sup>41)</sup>。

開館は年中無休の8時30分から17時00分までで、入場無料であった。学校団体の利用が主で、昭和12年度は12万2000人<sup>42)</sup>、昭和14年度は16万人<sup>43)</sup>の来観者があった。



【図6】有栖川宮記念公園平面図（●が東京郷土資料陳列館）

### 3 東京郷土資料陳列館における考古資料展示

東京郷土資料陳列館の展示室は1室であるが、壁面から中央に向かって3箇所、凸型に壁を迫り出す構造となっている。これにより6箇所の仕切り部屋が作られた。図表や写真、絵画が主な展示資料であったことから、それらを掲示する壁面を効率的に確保した設計となっている。そして中央部に4つの展示ケースが設置された【図7】。『東京郷土資料陳列館陳列目録』<sup>44)</sup>によると、展示は「東京の輪郭」（第1区）、「自然界の状態」（第2区）、「文化の状態」（第3～5区）、「市政とその施設」（第6～7区）、「産業」（第8区）という5つの主題で8区の展示構成であった。

先史・原史時代の展示は、「文化の状態」（第3～5区）である。ここでは、①石器時代の東京、②貝





【図7】東京郷土資料陳列館展示室内写真 公益財団法人東京都公園協会所蔵

塚、③石器時代の器具（標本）、④上代の東京、⑤大森の横穴（模型）、⑥埴輪、⑦原始時代の遺物、⑧原始時代遺跡分布図、⑨武蔵野の開拓と韓民族、⑩武蔵国分寺、⑪国分寺瓦の色々、⑫板碑などが挙げられている<sup>45)</sup>。

4つの展示ケースは「自然界の状態」（第2区）と「文化の状態」（第3～5区）で利用された。「文化の状態」（第3～5区）では、石器時代の遺物として、縄文土器（目黒区出土）、弥生土器（王子区出土）、石斧・石匙・石錘・石皿・敲石・凹石・骨銚・貝輪（東京付近出土）、当時の食糧標本があり、原史時代の遺物として埴輪・土器・玉類、大森の横穴（模型）を展示。また、⑪に関連した国分寺瓦、⑫に関連した板碑類、そして近世遺物の松平土佐守屋敷跡出土瓦や焼塩壺、灯明皿及び泥面子もケース等で展示されていた。

『東京郷土資料陳列館陳列目録』掲載資料と江戸東京たてもの園に移管された資料を比較すると、目黒区出土の縄文土器は油面遺跡出土勝坂式及び加曾利E I式土器（旧番号19-105）、東山貝塚出土勝坂

式、加曾利B式土器（旧番号19-106）及びミニチュア土器（旧番号19-211）が該当する。打製石斧は多摩市連光寺出土（旧番号19-61～104）、石皿は瑞穂町出土（北多摩郡石畑村、旧番号19-243）、磨石及び当時の食糧標本（貝殻）は大田区千鳥窪貝塚出土（旧番号19-3、156-0005・0006）、がそれぞれ該当するものと思われる。

王子区出土弥生土器は『東京郷土資料陳列館観覧案内』の表紙を飾り、山内清男著『日本先史土器圖譜』<sup>46)</sup>にも掲載された北区飛鳥山遺跡出土須和田式土器（旧番号19-115）である。

原始時代の遺物のうち、埴輪は芝丸山第1号墳、第3号墳及び第9号墳などから出土した円筒埴輪片<sup>47)</sup>を展示していたと思われる。土器及び玉類に該当する資料は不明である。

考古学模型標本のうち、『東京郷土資料陳列館陳列目録』から展示ケースに収められていたことが確実なのは、貝輪【図1-2】と大森の横穴である。大森の横穴は、大田区内に分布する横穴墓を積層模型で示したものである。大森の横穴模型標本は、後述する片倉信光が製作したものであり、昭和13年（1938）に東京郷土資料陳列館を退館後、当該地域の横穴墓分布調査を昭和5年（1930）頃から進んでいた菊池義次に寄贈されたが、戦災で焼失した<sup>48)</sup>。菊池義次は多摩川下流域右岸の台地について、馬込、塚越、池上、久ヶ原、根岸及び鶉の木という地域単位を設定し、横穴墓群の徹底調査を企画している。模型標本にもその成果が反映されていたと考えられる。

前段で報告した考古学模型標本13点のうち、展示されていたことが確認できたのは貝輪【図1-2】のみであった。これ以外の模型標本の利用については、開館から昭和13年（1938）頃まで陳列館の運営に携わっていた考古学者・片倉信光の活動から復元することとしたい。

## 4 考古学者・片倉信光と東京郷土資料陳列館

### (1) 片倉信光の経歴

東京郷土資料陳列館嘱託であった片倉信光は、明治42年（1909）北海道千歳水産試験場にて出生、間もなく宮城県白石市に帰郷し、宮城県白石中学校に入学。昭和5年（1930）國學院大學高等師範部に入学し、鳥居龍蔵から考古学の薫陶を受ける。同年7月13日の武蔵野会による品川大森蒲田方面見学旅行に参加<sup>49)</sup>しており、大学入学から間を置かずして武蔵野会に入会していたことがわかる。

昭和6年（1931）に上代文化研究会幹事<sup>50)</sup>、昭和8年（1933）には上代文化研究会機関誌『上代文化』編集委員<sup>51)</sup>に就任した。昭和8年（1933）6月には、森本六爾が主宰していた東京考古学会に入会<sup>52)</sup>、同年12月には小林行雄、丸茂武重らとともに東京考古学会機関誌『考古學』の編輯委員となっている<sup>53)</sup>。昭和9年（1934）、國學院大學卒業。3月14日には卒業祝を兼ねた機関誌『考古學』の編輯会議が森本六爾宅で行われた<sup>54)</sup>。そして、同年より東京郷土資料陳列館嘱託となる。その後、宮城県白石市に戻り、昭和13年（1938）宮城県仙台市斎藤報恩会博物館学芸員を委嘱される。この間に片倉家15代を継ぎ、男爵を襲爵。昭和15年（1940）には奥州白石郷土工芸研究所を設立し、白石和紙の復興に寄与した。昭和21年（1946）7月に斎藤報恩会博物館を退館、以後は白石市史編纂委員（昭和31年～昭和60年）、白石市文化財保護委員（昭和39年～昭和52年）など、旧領地内の文化財や伝統工芸の保護に尽力した。

昭和17年(1942)から昭和40年(1965)まで、仙台市青葉神社宮司も歴任している。昭和60年(1985)5月3日逝去<sup>55)</sup>。

なお、昭和30年(1955)から宮城県白石市立白石中学校実務学級の授業の一環として、自身が所蔵していた宮城県蔵王町鍛冶沢遺跡出土遮光器土偶<sup>56)</sup>から直接型取りし、白石市周辺で採掘される粘土を用いて複製標本を製作・販売することにも協力、複製模型を「ふえるの神様」と命名した<sup>57)</sup>。

## (2) 片倉信光の考古学研究

片倉信光が考古学を志向した経緯は詳らかでないが、國學院大學入学が契機となったことは間違いない。旧領地の宮城県白石市と東京都大田区が主なフィールドで、弥生時代から古墳時代を研究対象としていた。

最初の論文は宮城県白石市鷹巣古墳群の踏査記録で、昭和5年(1930)6月に不時発見された4基の円墳とその出土品に関する概報である<sup>58)</sup>。鷹巣古墳群は5世紀後半から7世紀にかけて築造された古墳群で、帆立貝式古墳の瓶ヶ盛古墳などが現存する。出土品の概要報告の後、これらが奈良朝以前のもので、大和族の北方侵出を示す好資料であるという鳥居龍蔵の所見を引用。「此の貴重なる遺蹟を保護し保存せられん事を望む次第である。」<sup>59)</sup>という一文で概報は締めくくられているが、昭和40年(1965)春の大規模宅地造成に伴う踏査を片倉信光は指導しており<sup>60)</sup>、古墳の一部は昭和46年(1971)に宮城県指定史跡に指定された。古墳については、鷹巣古墳群の北に位置する白石市郡山横穴墓群の概要報告<sup>61)</sup>や、大田区久ヶ原で横穴墓を発掘し人骨3体と土器を採集するなどしている<sup>62)</sup>。

もう一つの研究対象は関東地方を代表する弥生時代集落で、出土土器が弥生時代後期の標式となっている大田区久ヶ原遺跡である。昭和2年(1927)に中根君郎と徳富武雄によって発見され、学界に報告された久ヶ原遺跡<sup>63)</sup>に片倉信光が通うようになったのは、昭和6年(1931)3月である。学年試験期間中に散歩していた際、切通しの側壁に竪穴建物跡の断面を発見し、記録を取るようになったもので、その概要は昭和6年(1931)5月30日の上代文化研究会第1回例会で報告され、『上代文化』第6号にて本報告がなされた<sup>64)</sup>。

本報告では、片倉信光自身が実測した67軒の竪穴建物跡断面図を床面形態、側壁形状、内部構造などから分類。一方で形態分類に終始することなく、硬化した床面や間層から竪穴建物跡の建て替えを想定したり、住居用と工業用の炉跡を焼土の深度から推定したりするなど、詳細な観察に基づく所見を披瀝している。また、竪穴掘方が明瞭であることや石製品が出土していないことから原始的金属器の存在を想定し、後に青銅片を採集したことで本遺跡の文化段階に言及する点など、大学2年生とは思えない卓見である。

久ヶ原遺跡の調査は昭和8年(1933)10月以降、東京考古学会により進められ、森本六爾、小林行雄、丸茂武重、菊池義次、片倉信光らにより10軒以上の竪穴建物跡が発掘された<sup>65)</sup>。炭化した茅や竹など焼失家屋の存在も確認され、調査報告は昭和9年度後半期に発表されると予告されたものの、その成果は装飾された壺形土器と、加飾のない甕形土器という弥生式土器の様式要素単位の関東地方における一例として森本六爾により紹介され<sup>66)</sup>、小林行雄が南関東地方の弥生時代後期の土器様式として久ヶ原式を

設定した<sup>67)</sup>に留まった<sup>68)</sup>。

昭和5年(1930)國學院大學に入学し、東京郷土資料陳列館囑託を経て斎藤報恩会博物館学芸員を委嘱される昭和13年(1938)までの片倉信光の考古学研究を概述した。大学入学以来、考古学研究を指導したのは鳥居龍蔵である。この段階では、鳥居龍蔵が会長や幹事を務めていた上代文化研究会や武蔵野会を中心に活動し、機関誌『上代文化』及び『武蔵野』に寄稿していた。昭和8年(1933)、東京考古学会に入会すると、活動の主軸はこちらに置かれるようになる。東京考古学会を主宰していた森本六爾に片倉信光が知遇を得るようになったのも、鳥居龍蔵を介してのことと思われる。鳥居龍蔵は奈良から上京してきた森本六爾の学問的庇護者であり、浅川ミツギとの婚約に際しては媒酌人を務めるなど公私に互る支援者であった。

当初、上代文化研究会会員と行っていた大田区久ヶ原遺跡の踏査は、昭和8年(1933)以降、森本六爾や小林行雄ら東京考古学会が調査主体となる。森本宅への訪問や書信も頻繁となり<sup>69)</sup>、その関係は昭和11年(1936)1月の森本六爾逝去まで続いた。白石市郡山古墳群の概報において、白石盆地内の古墳時代集落跡との相互関係や、隣接する鷹巣古墳群との社会的意義の解明の必要性を指摘している点<sup>70)</sup>は、森本六爾から受けた薫陶の一端を示していると言えるだろう。

### (3) 東京郷土資料陳列館の展示計画

片倉信光が東京郷土資料陳列館囑託に採用された経緯は記録上確認できていない<sup>71)</sup>。東京市が高松宮宣仁親王から御用地の賜与を受けるため、公園設計案を完成させたのが昭和8年(1933)12月である<sup>72)</sup>。設計は井下清によるもので、この案には東京郷土資料陳列館の計画も含まれていた。

ところで、井下清は、大正5年(1916)6月に芝公園内で樹木の移植中に出土した2体の人物埴輪を東京帝国大学理科大学人類学教室に持ち込んだことで、鳥居龍蔵と知遇を得ていた<sup>73)</sup>。この人物埴輪が契機となり設立されたのが武蔵野会(現、武蔵野文化協会)である<sup>74)</sup>。東京の歴史や文化に深い造詣のあった井下清であるが、東京郷土資料陳列館の展示や運営について、専門家である鳥居龍蔵に相談し、卒業を控えていた片倉信光を推薦したのではないか。國學院大學高等師範部に在籍していたこと、そして片倉家が華族であり、将来的に男爵を襲爵するという家柄も推薦に際して重要な要素だったはずである。

昭和9年(1934)8月に発行された鳥居龍蔵の論考に、「或日、武蔵野會員で、高松宮殿下恩賜公園東京市郷土館囑託片倉氏が來訪あり」<sup>75)</sup>とあることから、片倉信光の採用は9月開館以前であり、展示計画や設計にも関与していたことが伺える。

この時、片倉信光が訪問した理由は、参考に読んでいる『國史を彩どる我等の郷土 東京府』<sup>76)</sup>の評価を求めるため、鳥居龍蔵は先史・原史時代の記載で修正が必要な箇所を指摘しつつも、「本書は我が郷土史として最初の試みであつて、先史時代あたりでは、先づこれだけの諸點の誤を正されたならば、よい簡易な郷土史であると云つてよい」<sup>77)</sup>と評している。鳥居龍蔵に指導を仰いだ時期などから、片倉信光が東京郷土資料陳列館の展示設計に際して本書を参考にしていただいていたことがわかる。

『國史を彩どる我等の郷土 東京府』は、昭和8年(1933)に上下2巻で博美社より出版された。著者の土上新作は、高等師範学校文科を卒業し、明治26年(1893)に誠之尋常高等小学校准訓導として採用、



【図8】『國史を彩どる我等の郷土 東京府』上巻 4頁(右)及び19頁(左)

明治34年(1901)以降は東京府師範学校(後に東京府青山師範学校)で歴史を担当した<sup>78)</sup>。『國史を彩どる我等の郷土 東京府』執筆時は既に教職からは退いている。高等師範学校で土上新作に歴史を教授したのは、三宅米吉であった。

本書は国定教科書『小學國史』の内容をもとに、東京府内にある遺跡や遺物、旧俗などを写真や絵画を用いて解説したもので、郷土教育の教科書という位置付けであった。

上巻は「先住民族」から「北條氏と關東」までの20節、下巻は「天下一統」から「多摩御陵」までの15節で構成される。巻頭写真や挿図をふんだんに使い、折込図版「東京府下史蹟名勝分布圖」を付すなど、小学生にも興味を持ちやすくする工夫がなされている。

東京郷土資料陳列館で考古遺物や模型標本が展示された「文化の状態」と関係があるのは、上巻「第一 先住民族」及び「第五 武藏の開拓」である。

「第一 先住民族」は石器時代に関する記述で、港区芝丸山貝塚や町田市高ヶ坂石器時代遺跡の概要、石器、土器の種類や用途などが写真入りで紹介される【図8右】。縄文土器には多摩川上流域に多く分布する厚手式と、多摩川下流域から大森、芝公園、湯島など沿岸部にかけて分布する薄手式の2系統があり、前者は狩猟を生業とした山林族、後者は漁撈を生業とした海岸族であるという説など、鳥居龍藏

の主張<sup>79)</sup>が随所に引用された。

「第五 武藏の開拓」では、日本武尊による東征後に開拓が進んだ武蔵野において、古墳や副葬品などから日本人の祖先の生活や風俗について記述したものである。明治30年(1897)及び31年(1898)に坪井正五郎が発掘した芝丸山古墳群の概要や、須恵器、鏡、刀、装身具など副葬品や埴輪が日本人の祖先の風俗を知る上で重要な資料であると説く。芝丸山古墳墳丘、高坏、五鈴鏡、蕨手刀、頭椎大刀、勾玉・管玉・切子玉、耳環、円筒・馬形・人物埴輪の写真が掲載されている【図8左】。

## 5 東京郷土資料陳列館における考古学模型標本の利用

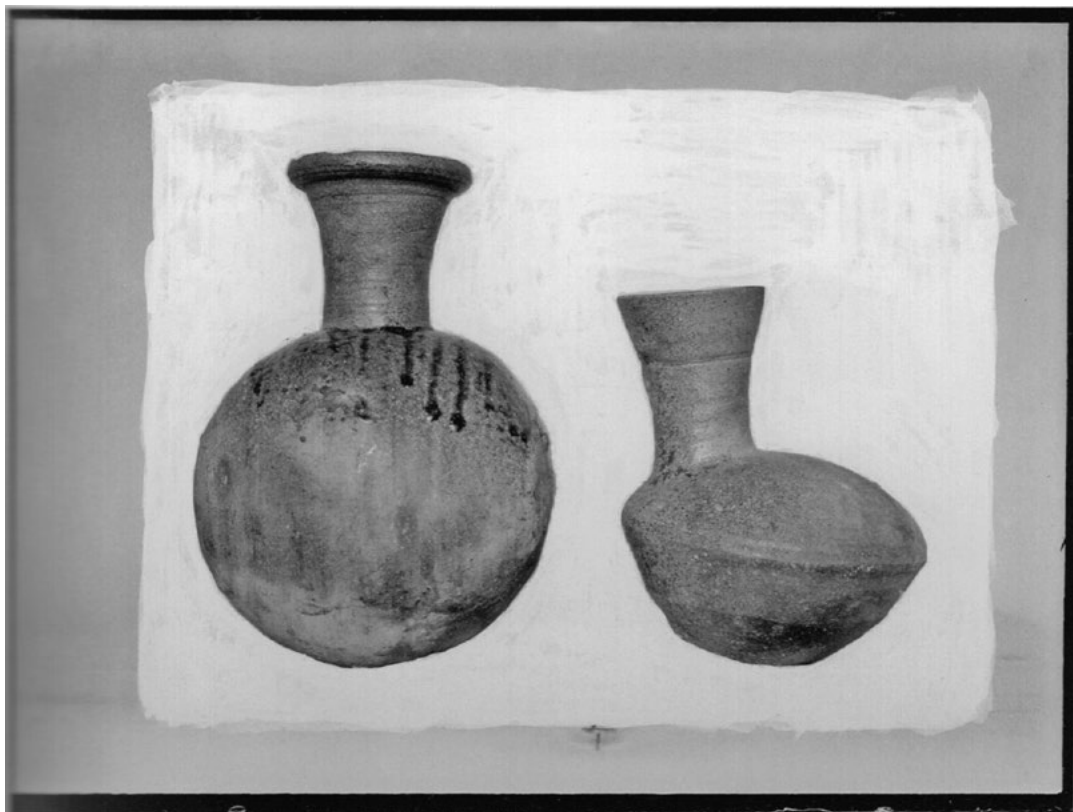
東京郷土資料陳列館の展示設計や運営に携わった片倉信光について、自身の考古学研究、師弟など人物相関関係、展示計画立案に際して参考にした『國史を彩どる我等の郷土 東京府』の概略を述べた。これらの内容を踏まえ、改めて東京郷土資料陳列館旧蔵の考古学模型標本を俯瞰してみたい。

13点の考古学模型標本の半数を占めるのは、須恵器模型標本【口絵2】【図3】である<sup>80)</sup>。『國史を彩どる我等の郷土 東京府』「武藏の開拓」において古墳発掘物の冒頭に記される須恵器は、「青鼠色の陶質土器で祭祀に用ひる。盤・坏・盃・埴・平瓶などがある。こののは高坏である。」という解説で、有蓋高坏の写真が掲載される。列記された機種のうち、模型標本と一致するのは坏【図3-6・7】及び盃【図3-8】である。甗【図3-9】、提瓶【図3-10】、瓶【図3-11】及び横瓶【図3-12】は、球体の胴部に頸が付くという形態からみれば、広義の埴に含められるかもしれない。

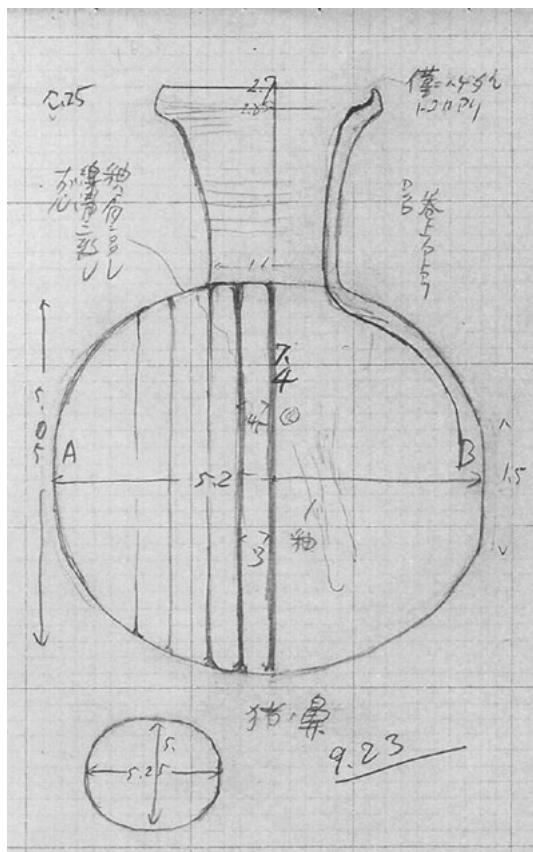
次に、片倉信光自身が製作した大森の横穴模型標本との関係を見ていきたい。片倉信光のフィールドであった大田区域では、明治期後半から横穴墓の発見・調査が蓄積され、今日までに約260基が検出されている<sup>81)</sup>。大正15年(1926)6月23日、森本六爾と谷木光之助は大田区久が原五丁目で土取り作業中に開口した横穴墓の調査を行った。猪鼻1号墓(現、久ヶ原30号横穴墓)と命名された横穴墓は、玄室と羨道が区別できない無袖形態を呈する平面形で、羨道部付近に境界石を備えていた。境界石から羨道部側で発見されたのがフラスコ瓶と平瓶【図9】である<sup>82)</sup>。2点の須恵器は写真とスケッチ図が公表されていたが、森本六爾の野帳に実測図があることが確認できた。【図10】は野帳10、116頁<sup>83)</sup>で、実測図下に「猪ノ鼻」の記載がある。口縁部径2.7寸(8.1cm)、胴部最大径5.25寸(15.9cm)、器高7.4寸(22.4cm)を測り、口縁部付近は「僅ニハゲタルトコロアリ」、胴部には「釉ハ肩ニ多シ」という特徴が明記されている。口縁部は受口であり、「瓶」模型標本【図3-11】同様、7世紀中葉に比定される。

同様のフラスコ形瓶は、徳富武雄及び中根君郎が昭和5年(1930)9月に調査した久ヶ原11号横穴墓<sup>84)</sup>などでも発見されている。片倉信光もまた、久ヶ原遺跡と併行して横穴墓の調査を行っており、フラスコ瓶が当該地域の横穴墓で普遍的な副葬品であることを理解していたはずである。大森の横穴模型標本は横穴墓の立地や分布を示す積層模型であり、その副葬品の代表例として「瓶」模型標本を選定・展示していたのではないか。

須恵器に続いて「武藏の開拓」で紹介されるのは勾玉、管玉、切子玉、耳環など装飾品である。陳列目録<sup>85)</sup>には玉類の記載があるが、模型標本で該当するものはなく、江戸東京たてもの園に移管された実



【図9】猪鼻1号墓（久ヶ原30号横穴墓）出土須恵器写真 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館提供



【図10】  
猪鼻1号墓  
（久ヶ原30号横穴墓）  
出土須恵器実測図  
奈良県立橿原考古学研究所  
附属博物館提供

物資料の中にも確認することはできなかった。

最後に紹介される埴輪【図8左】には円筒と土偶があり、前者は墳丘の装飾や区画のために建てられ、孔は埴輪同士をつなぐためのものと説明される。埴輪土偶は円筒埴輪の上部に男女の人形を載せ、死者生前の供人を模したもので、当時の結髪や服装などを知ることができると解説されている。

考古学模型標本は、埴輪女子2体【図1-3、図2-4】、挂甲武人埴輪1体【図2-5】、円筒埴輪1点【図4-13】の計4点が移管されている【口絵3】。観覧案内では「上代墳墓の周囲に樹てられた埴輪から当時の風俗を知ることが出来る。芝公園出土其他<sup>86)</sup>とあることから、芝丸山古墳群出土円筒埴輪片が展示ケースに収められていたことは間違いない。一方で、円筒埴輪片では全体の形状や孔を理解することは難しく、また完形の円筒埴輪を用意することも困難である。「埴輪円筒」模型標本【図4-13】は、破片資料が持つ情報の限界を補完するため、参考資料として添えられたのではないだろうか。

埴輪女子模型標本は何れも鳥田髻を結っており、勾玉【図1-3】や耳環【図2-4】の装着方法がわかる好例である。栃木県綾女塚古墳出土埴輪女子模型標本【図2-4】は盤領で左衽の装束、群馬県世良田出土挂甲武人埴輪模型標本【図2-5】は甲冑及び武器を装備したもので、古墳時代の装束や風俗を立体的に理解することができる標本である。3体の人物埴輪は、発見当初から古墳時代の風俗を表徴する資料として考古学者の研究に供されてきたもので、服飾史や有職故実研究においても第一級の資料であった。教科書の挿図<sup>87)</sup>や展覧会への出品<sup>88)</sup>を通じて市民に膾炙されていた資料でもあった。「当時の風俗を知ることが出来る」という観覧案内とも整合性が取れていることから、展示されていた可能性が高い。なお、群馬県世良田出土挂甲武人埴輪模型標本【図2-5】の胴部及び円筒部に針金が巻かれているが、これは展示ケースではなく壁面に括りつけられていた可能性を示唆している。

想像を逞しくすれば、古墳時代と石器時代の衣装や風俗を比較するために「埴輪土偶」模型標本【図1-3】を展示したとも考えられる。しかし、『國史を彩どる我等の郷土 東京府』に土偶の記載がないことや、出土地が東北地方に限定される遮光器土偶であることから、積極的には支持できない。

## おわりに

東京郷土資料陳列館の石器・古墳時代展示は、『國史を彩どる我等の郷土 東京府』を軸に構成されていたものの、若き考古学者・片倉信光が國學院大學在学の4年間で習得し、調査した成果が遺憾なく発揮されたものであった。竪穴建物跡の分析や発掘調査を推進し、自身の代表的な研究とも言える大田区久ヶ原遺跡の調査成果が展示に反映されていないのは、弥生文化が稲作農耕文化であるという研究が考古学界で展開されていくのが昭和8年(1933)以降<sup>89)</sup>であるためである。片倉信光は、その一端を牽引していた森本六爾から直接、最新の弥生文化研究について触れる機会があったはずであるが、展示に反映させることは敢えてしなかった。

それは、弥生文化研究が緒についたばかりで、その学説が広く支持されていたわけではなかったこと。そして、『記』『紀』神話から始まる当時の国定教科書の内容に、弥生文化を組み込む余地がなかったためである<sup>90)</sup>。「小學兒童に郷土史の初歩を繪畫と圖表に依つて説明すべく」<sup>91)</sup>、という井下清が主導した





【図11】 東京郷土資料陳列館での授業風景 江戸東京たてもの園所蔵

東京郷土資料陳列館の趣意に忠実に準じたのである。

【図11】は東京郷土資料陳列館展示室を撮影したもので、中央に立つ男性と相対する子供は教師と児童という関係であろう。展示室では時としてこのような授業が展開されていたようである。今回報告した13点の考古学模型標本の大半は、『國史を彩どる我等の郷土 東京府』に掲載された考古遺物の補足資料であり、あるいは片倉信光の横穴墓研究に基づく展示を補完する目的で購入・展示された可能性を指摘した。考古学者にとっては出土地が明確な1点の埴輪片の方が、外観を模した模型標本に比べて数段の価値があり、展示資料としても実物資料を選択するだろう。

しかし、東京郷土資料陳列館を実際に利用していた小学校の教師の立場ではどうだろうか。表裏の判別すら難しい埴輪片よりも、教科書や副読本に掲載された写真と同じ形の模型標本の方が、児童への説明や扱い方において汎用性が高いはずである。考古学模型標本を前に感じた筆者の違和感は、学校教材として製作・販売されていた模型標本が博物館資料として利用されていたことに起因していたようである。模型標本がどのような来歴を辿って現在に至ったか、時と共に欠落していくその背景に迫ることが、資料の本質に肉薄する唯一の方法であることを改めて痛感した次第である。

東京郷土資料陳列館は、戦前の東京における郷土教育博物館の先駆として位置付けることができる。そして、そこには考古学者としてだけでなく、教育者としての片倉信光の眼差しがあったのである。

## 謝辞

本稿執筆に当たり、以下の方々、研究機関より御教示並びに御協力を賜りました。ここに明記し、深く御礼を申し上げます（順不同、敬称略）。

阿部由紀洋、飯田茂雄、江里口省三、江里口友子、河野正訓、北井利幸、甲田篤郎、斎藤あや、品川欣也、鈴木希帆、高山 優、平田さゆり、松井かおる、松崎元樹、村野正景、森本 徹、山本 亮、江戸東京たてももの園、江戸東京博物館、京都府京都文化博物館、東京国立博物館、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

なお、本稿はJSPS科研費JP21K00979の助成を受けて行った研究成果を含むものです。

## 【註】

- 1) 平田健2011「学校教育における考古資料教材の開発とその学史的意義－ドルメン教材研究所『古代土器複製標本』の評価をめぐって－」『学習院大学史料館紀要』第17号、1～26頁、学習院大学史料館
- 2) 小林克編1999『江戸東京たてももの園考古資料一覧－旧武蔵野郷土資料館収蔵資料－』東京都江戸東京博物館分館 江戸東京たてももの園
- 3) 村野正景・平田健2016「京都府立鴨沂高等学校所蔵の考古・人類学模型標本について－人種模型標本に関する学史的考察－」『朱雀』第28集、1～18頁、京都府京都文化博物館  
村野正景編2020『学校の文化資源の「創造」－京都府立鴨沂高等学校所在資料の発見と活用Ⅰ－』学校資料研究会・京都府立鴨沂高等学校京都文化科
- 4) 市元壘・瀬谷今日子・平田健・村野正景2017「学校所在資料の過去・現在・未来－第1部の趣旨－」『考古学研究』第64巻第3号、4～6頁、考古学研究会  
平田健2020「学校教育與日本考古學：初等・中等教育的考古活動之歴史及現在」『2017年臺日考古論壇會議實錄』宜蘭縣立蘭陽博物館
- 5) 松井かおる2015「プロローグ 武蔵野郷土館前史」『下布田遺跡 武蔵野の歴史と考古学』9～16頁、江戸東京たてももの園
- 6) 東京郷土資料陳列館旧蔵の考古学模型標本については、本稿以前に以下において概要を報告している。  
平田健2017「考古学・人類学者と学校教材～模型標本を例に～」『“まち”と“ミュージアム”の文化が結ぶ幸せな私たち3 博学社連携フォーラム・博学社連携シンポジウム報告書』85～92頁、京都文化博物館地域共働事業実行委員会  
平田健2019「コラム 東京郷土資料陳列館の考古学展示 若き考古学者、片倉信光の着想」『港区立郷土歴史館特別展 港区と考古学－未来へ続く、遺跡からのメッセージ－』39頁、港区立郷土歴史館
- 7) 財団法人東京都公園協会編1990『武蔵野郷土館所蔵資料目録Ⅰ－考古1－』小金井公園武蔵野郷土館  
財団法人東京都公園協会編1991『武蔵野郷土館所蔵資料目録Ⅱ－考古2－』小金井公園武蔵野郷土館
- 8) 水澤千越之編1930『歴史地理學用標本目録』株式會社 島津製作所標本部
- 9) 平田健2017「東京女子高等師範学校旧蔵の考古学模型標本－考古学者 下村三四吉の女子歴史教育」『日本考古学史研究』第5号、69～102頁、日本考古学史学会
- 10) 榎本勝多編1905「貝塚の好標本」『東洋學藝雜誌』第287号、361～362頁、東洋學藝社
- 11) 大野雲外1895「雜錄 貝輪に就いて」『東京人類學會雜誌』第22巻第249号、99～100頁、東京人類學會事務所
- 12) 江見水蔭1909『地中の秘密』博文館
- 13) 須藤求馬1896「鎌倉發見埴輪圖説（卷末圖を見よ）」『東京人類學會雜誌』第12巻第127号、11～14頁、東京人類學會事務所
- 14) 1968『京都大学文学部博物館 考古学資料目録』第2部 日本歴史時代、京都大学
- 15) 沼田頼輔・大野雲外1898『日本考古圖譜 古埴物及青銅器之部』嵩山房
- 16) 坪井正五郎1909「第一、鎌倉にて發見されたる埴輪に就て」『鎌倉文明史論』403～425頁、日本歴史地理學會

- 17) 註13に同じ。
- 18) 註15に同じ。
- 19) 菅原恒覽1886「雀宮近傍ノ古墳」『東京人類學會報告』第1巻第5号、84～86頁、東京人類學會
- 20) 秋元陽光・飯田光央・篠原真理1998「綾女塚古墳の課題」『栃木県考古学会誌』第19集、109～133頁、栃木県考古学会
- 21) 八木契三郎1895「各地發見ノ埴輪類(第百九號ノ續)」『東京人類學會雜誌』第10巻第112号、388～393頁、東京人類學會事務所
- 22) 沼田頼輔・大野雲外1898『日本考古圖譜解説 全』嵩山房、24頁
- 23) 高橋健自1929『歷世服飾圖説』上、聚精堂書店
- 24) 註21に同じ。
- 25) 註20に同じ。
- 26) 豊元義孝編1930「世良田出土の武者埴輪對和田千吉氏問題」『上毛及上毛人』第163号、53～55頁、上毛郷土史研究會  
本誌転載の『上毛新聞』によると、発見者の高柳倉吉は和田千吉を通じて東京帝室博物館に寄付したという認識であった。この時、和田千吉は手数料5円を高柳倉吉に渡している。その後、本埴輪は「和田千吉所蔵」として東京帝室博物館で展示されており、所有権をめぐる紛争となっていたことがわかった。最終的にどのような解決が図られたかは判然としない。  
また、註9において「昭和五年(一九三〇)頃には、メトロポリタン美術館から和田千吉に対し執拗な譲渡の申し入れがある」と述べたが、これは昭和4年(1929)、コロンビア大学の動物学者で、メトロポリタン美術館の武具・甲冑部門の筆頭学芸員も務めたバッシュフォード・ディーン(Dr. Bashford Dean)であったことも本誌転載の『時事新報』から判明した。
- 27) 浅田芳朗1970『人見塚の家～和田千吉小伝～』和田千吉先生記念会
- 28) 註9に同じ。
- 29) 1920『東京帝室博物館歴史部第二區列品埴輪目録』東京帝室博物館
- 30) 1956『収藏品目録(考古 土俗 法隆寺献納宝物)』東京国立博物館  
時枝務2001「近代国家と考古学—『埋蔵物録』の考古学的研究—」『東京国立博物館紀要』第36号、77～257頁、東京国立博物館
- 31) 高橋健自『埴輪標本解説』  
本模型標本の販売年代は、高橋健自が東京帝室博物館学芸委員であった期間が明治37年(1904)から大正11年(1922)であること、名古屋市中区が成立したのが明治41年(1908)であることから明治末から大正期とした。  
清水五六が製造・販売していた『埴輪標本』は、同円筒埴輪以外に「男子埴輪土偶」(埼玉県桶川市八幡原出土)、「武装男子埴輪土偶」(埼玉県熊谷市上中条出土)、「武装男子埴輪土偶」(埼玉県深谷市大字上敷免出土)、「女子埴輪土偶」(茨城県銚田市青柳出土)、「女子埴輪土偶頸」(埼玉県熊谷市上中条出土)、「埴輪馬」(埼玉県熊谷市上中条出土)の7種一組で、原品は何れも東京帝室博物館所蔵である。
- 32) 平成31年(2019)1月16日付東博研第107-142号で許可を受けた特別観覧において確認した。
- 33) 註8に同じ。
- 34) 島津源蔵編1914『地理及歴史學用標本目録』島津製作所標本部
- 35) 註9に同じ。
- 36) 東京市役所『有栖川宮記念公園案内』
- 37) 前島康彦1981『有栖川宮記念公園』郷学舎
- 38) 大渡忠太郎編1934「博物館ニュース 有栖川宮記念公園の郷土博」『博物館研究』第7巻第2号、15頁、日本博物館協會
- 39) 1934「工事進捗の有栖川宮記念公園」『東京市公報』昭和9年6月28日  
建築申請書(東京都公文書館所蔵)によると、建物構造は主体木造、外壁は腰杉下見板張りの上クレオソート塗り上部壁中貫木摺打ラス張りリソイド粗面仕上げ、内壁は中木米松腰麻布張り、事務室腰は羽目板張りの上ペンキ塗り上部壁建テキス張りであった。

- 40) 井下清1940「郷土の歴史と其の發達を市民に周知せしむべし」『本邦都市發達の動向と其の諸問題』上、301～310頁、  
全國都市問題會議事務局
- 41) 註39に同じ。
- 42) 註40に同じ。
- 43) 1938「有栖川宮記念公園東京市郷土資料陳列館の現況」『東京市公報』昭和13年4月23日、848～851頁
- 44) 1940『東京郷土資料陳列館陳列目録』東京市役所
- 45) 1940『東京郷土資料陳列館觀覽案内』No.2、東京市役所
- 46) 山内清男1940『日本先史土器圖譜』第一部（関東地方）第五輯、図版40
- 47) 令和元年（2019）10月9日に江戸東京たても園にて、東京国立博物館の河野正訓・山本亮氏と資料調査を行った。  
昭和10年（1935）11月20日に芝丸山第1号墳で採集した円筒埴輪片をはじめ、「昭和十三年三月」乃至「昭和十三年春」  
に芝丸山第1号墳、第3号墳及び第9号墳で採集された円筒埴輪片、「芝公園」乃至「芝」の墨書がある円筒埴輪片の  
計10点を実見した。展示されていた資料は、「芝公園」乃至「芝」の墨書がある円筒埴輪片ではないかと考えられる。
- 48) 菊池義次1955「南部地方横穴群に就いて—特に久ヶ原台地附近を中心として見たる—」『古代』第14・15合併号、41～  
65頁、早稲田大學考古學會
- 49) 三輪善之助1930「會報 品川大森蒲田方面見學旅行記事」『武藏野』第16卷第2号、60～62頁、武藏野會
- 50) 森貞次郎1932「編輯後記」『上代文化』第7号、上代文化研究會
- 51) 福島則雄・片倉信光1933「編輯後記」『上代文化』第9号、上代文化研究會
- 52) 森本ミツギ1933「編輯所日記」『考古學』第4卷第7号、219～221頁、東京考古學會
- 53) 森本六爾編1933「東京考古學會會則抄」『考古學』第4卷第10号、東京考古學會
- 54) 森本ミツギ1934「編輯所日記」『考古學』第5卷第5号、144～145頁、東京考古學會
- 55) 片倉信光1988『白石和紙 紙布 紙衣』慶友社
- 56) 片倉信光1932「磐城國曲竹發見の土偶に就いて」『上代文化』第8号、89～91頁、上代文化研究會  
相原淳一1997「宮城県蔵王町鍛冶沢遺跡出土の土偶について」『仙台市博物館調査研究報告』第17号、17～24頁、仙  
台市博物館
- 57) 片倉信光1996「ふえるの神様の由来」『宮城県白石市立白石中学校実務学級四十年のあゆみ ふえるの神さま』白石  
中学校ふえるの会
- 58) 片倉信光1931「鷹の巣古墳見聞記」『上代文化』第4・5合併号、64～69頁、上代文化研究会
- 59) 註58に同じ。
- 60) 太齋享1985「片倉先生の思い出」『赤い本』片倉信光氏追悼論文集、70～71頁、赤い本同人会
- 61) 片倉信光1934「郡山横穴古墳に就て」『武藏野』第21卷第2号、21～24頁、武藏野會
- 62) 片倉信光1931「東京府下池上町久ヶ原彌生式堅穴に就て」『上代文化』第6号、35～52頁、上代文化研究會
- 63) 斎藤あや編2017『土器から見た大田区の弥生時代—久ヶ原遺跡發見、90年—』大田区立郷土博物館
- 64) 註62に同じ。
- 65) 森本六爾1934「發掘・發見 東京市久ヶ原彌生式堅穴の發掘」『考古學』第5卷第1号、28頁、東京考古學會
- 66) 森本六爾1934「彌生式土器に於ける二者—様式要素單位決定の問題—」『考古學』第5卷第1号、3～8頁、東京考  
古學會
- 67) 森本六爾・小林行雄編1938『彌生式土器聚成圖録』正編、東京考古學會
- 68) 森本徹氏が所蔵し、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館が保管・整理作業を進めている森本六爾関係資料中に、久ヶ  
原遺跡發掘調査中に撮影された5×7判のガラス乾板が8枚含まれ、公開されている。  
菅谷文則・小池香津江・北井利幸編2011『森本六爾関係資料集』I、財団法人由良大和古代文化研究協会  
また、久ヶ原遺跡出土土器及び堅穴出土貝類が近年報告された。  
北井利幸・小池香津江編2021『森本六爾関係資料集』IV、公益財団法人由良大和古代文化研究協会
- 69) 中橋彰吾1985「片倉先生と考古学」『赤い本』片倉信光氏追悼論文集、73～77頁、赤い本同人会
- 70) 註61に同じ。

71) 東京郷土資料陳列館嘱託の職務は展示室内に留まらず、有栖川宮記念公園内の樹木に巣箱を設置するなど多岐に及んだ。

片倉信光1935「有栖川宮記念公園の巣箱」『庭園と風景』第17巻第9号、16～20頁、日本庭園協會

72) 註37に同じ。

73) 平田健2020「芝丸山古墳群の調査と東京における埋蔵文化財保護のあゆみ」『都市公園』第229号、34～37頁、公益財団法人 東京都公園協會

74) 鳥居龍藏1926「武藏野會成立當時の回顧」『武藏野』第8巻第2号、1～3頁、武藏野會

75) 鳥居龍藏1934「『國史を彩どる我等の郷土=東京府』を読む」『武藏野』第21巻第8号、1～5頁、武藏野會

76) 土上新作1933『國史を彩どる我等の郷土 東京府』上巻・下巻、博美社

77) 註75に同じ。

78) 1909『東京府青山師範學校一覽』東京府青山師範學校

79) 鳥居龍藏1918『有史以前の日本』磯部甲陽堂

80) 京都府女子師範學校では、株式会社鳥津製作所標本部の須恵器模型標本8点(坏、高坏、蓋坏、横瓶及び平居瓶)が郷土研究室に収蔵されていた。8点のうち5点は原品京都府南丹市八木町池上出土である。3点の須恵器、ほか土師器、円筒埴輪、鉄斧及び鉄刀模型標本も、原品は京都府内出土である。京都府内の古墳時代関係遺物模型を系統的に購入していたことが伺える。

京都府女子師範學校郷土研究室編1933『郷土教育の概要』

81) 松崎元樹1994「Ⅲ. 多摩川下流域左岸における横穴墓の検討」『考古学からみた大田区—横穴墓・古代・中世 資料編—』53～60頁、東京都大田区教育委員会

82) 森本六爾・谷木光之助1927「武藏南部に於ける特色ある横穴(上)」『中央史壇』第13巻第5号、52～62頁、國史講習會

83) 菅谷文則・北井利幸編2016『森本六爾関係資料集』Ⅲ、財団法人由良大和古代文化研究協會

84) 徳富武雄・中根君郎1931「東京府下荏原郡東調布町嶺の横穴」『人類學雜誌』第46巻第4号、138～148頁、東京人類學會

85) 註44に同じ。

86) 註45に同じ。

87) 東京女子高等師範學校で教鞭を執っていた考古学者・下村三四吉が編纂した高等女學校初級用の歴史教科書の挿図に、神奈川県采女塚古墳出土埴輪女子【図1-3】、栃木県綾女塚古墳出土埴輪女子【図2-4】及び埼玉県大谷出土円筒埴輪【図4-13】が描かれている。

下村三四吉編纂1925『女學校用 本邦歴史』上巻、成美堂・目黒書房

88) 昭和5年(1930)10月に帝室博物館で開催された埴輪特別展覧会には、群馬県世良田出土挂甲武人埴輪【図2-5】及び栃木県綾女塚古墳出土埴輪女子【図2-4】が出品された。

1930『埴輪特別展覧會目録』帝室博物館

89) 山内清男1932「日本遠古之文化 五四、繩紋式以後(前)」『ドルメン』第1巻第8号、60～63頁、岡書院

森本六爾編1933『日本原始農業』東京考古學會

90) 鳥居龍藏も『國史を彩どる我等の郷土 東京府』の課題として、「本書には、所謂彌生式土器使用者(私は固有日本人と云ふ)は、いづくにも取扱つて居ないが、これは我等祖先の東京府下に早く這入て來て居る一例として掲げねばなるまい」と述べている。

註75に同じ。

91) 註40に同じ。